

開会挨拶

ヒュー・リチャードソン

金児学長、教授およびスピーカーの皆様、ご参加の皆様、このたびは、ほぼ20年ぶりで、大阪に参ることができ大変嬉しく存じます。今回の着任以来、まだ東京の外へ出かけておりませんでした。以前に日本に駐在していたときに比べて地理的、社会的、文化的な側面で大きく変わりました。大阪も劇的に変わったことを目の当たりにしました。関西がいわゆる「失われた10年」の苦難を味わいながら、これだけ急速な回復を遂げられたことを大変嬉しく思います。

関西はヨーロッパにとって極めて重要な経済パートナーです。関西の経済規模はカナダよりも大きく、またヨーロッパからの貿易と投資にとって重要な相手先となっています。関西の輸入の約15%はヨーロッパからであり、関西に進出している300近くの外資系企業の約半分はEUの企業だということです。逆に多くの関西企業、例えばパナソニック、三洋電機、ダイキン工業などが欧州連合において現地法人を設立しており、両者間の経済・商業活動は極めて活発です。

関西がEUにとって重要であるということは、今年初めに欧州委員会のバローゾ委員長が関西を訪れたときにも強調されました。彼は神戸空港から関西入りしましたが、おそらく神戸空港を使う最初の世界的リーダーの一人になったのではないかと思います。そして「EUインスティテュート関西」を訪れました。これはEUに焦点を当てた教育を行うことに加え、アウトリーチ活動を行うためのものです。

このような背景の下で、駐日欧州委員会代表部と大阪市立大学が、このユーロと経済通貨同盟(EMU)に関するシンポジウムを共催することになりました。ここで大阪市立大学に対して心から御礼を申し上げたいと思います。このようなシンポジウムが大阪で開かれるということはある意味で当然なことだと思います。大阪は商都であり、多くの世界的企業の本拠地であります。まさに大阪では初めて日本の硬貨が鋳造され、現在でも続けられているのです。補足しますと、もともとの日本の明治時代の造幣局は、いわばヨーロッパと日本の合弁事業のはしりであったわけです。英国の専門家トーマス・キンダーなどの専門家が、明治時代に日本の硬貨鋳造の近代化をお手伝いしたのです。

一方、ユーロは、単に硬貨や紙幣が流通しているということだけではありません。ユーロは、すでに国際通貨であり、外貨準備の通貨となっています。今日は12カ国、まもなく13カ国のEU加盟国において、唯一の法定通貨であるだけでなく、国際債券市場におけるユーロのシェアは約30%になっています。つい最近誕生した通貨にしては、驚異的な数値です。

さらに重要なことは、ユーロ誕生によって欧州連合というものがEUの市民にとってより具体的かつ有形の存在になったということです。ユーロは、日本などヨーロッパの外で

は、ヨーロッパとしてのアイデンティティのシンボルとなっているわけです。欧州連合に対する関心の高まりをたどっていきますと、単一通貨が導入された1999年にさかのぼります。

従いまして、本シンポジウムにおいては、ヨーロッパの経済通貨同盟およびヨーロッパ統合のプロセス全体に関して意見を交換するのみならず、それに対応して、アジアにおけるより緊密な経済協力の見通しについても議論していきたいと思えます。私たちの経験を聞くことが、東アジアの今後を考えていくための良き材料の提供につながれば幸甚です。実りの多いシンポジウムとなることをお祈りしております。